

3413 貝殻と灯台：状況と心模様③

洋景和魂、日本文化に育まれた影響が、内奥にある。

若者ではない。大の大人の典型的な日本人。

だから、日本文化と海外文化の違いが、少しはわかるのかもしれない。

静中の禅に対する動中の禅、魂の静けさは、孤独の中になく、自然と人とが共に呼吸し合い、

人と人とが、一期一会の出会いを持つ。

茶道は、日本武士道とキリスト教のミサが結ばれて生まれた、とある。

柄杓ひしゃくの扱いは、剣道と弓道。茶碗と棗なつめの扱いは、ミサにおける聖体拝領の聖杯の扱い。

外国人を案内して、何度か訪ねた桂離宮の茶の庭にキリシタン灯籠がある。

手水鉢や遠近の廊下が記憶に残っている。

利休が、社交的な茶に、精神性を持ち込んだとある。私には、何とも難しい世界。

難しくしないほうがいい。シンプル、イズ、ビューティフル。

私に理屈は必要ない。直感と感性とフットワークのいい実践あるのみ。

写真道、西洋で生まれた写真芸術を、和の芸術にぜひしたい。

独特の感性が、日本人の内奥にあると信じたい。

写真とは、決して、自然の表面を写すものではない。東洋の精神、仏教への関心。

単なる、情報発信や記録でない側面がある。

デジタルは、虚像の側面がある。虚に口をつけると、嘘になる。

「平凡なものを緻密に見れば、非凡な発見がある」その出会いや発見がなんとも楽しい。

日本人だから、古都に生まれたから、感じるのか、

また、そう見えるのかわからないが、日本人はキーワード。

科学でない芸術、数値化されない領域、久楽流は「旅禅」「写禅」かも…

道なき道、指標のない所を歩く未知への挑戦は、実に面白い。
危険や避けられない運命があるかも知れない。それは苦しみであり、喜びであり、喜怒哀楽。
厳しくとも、峠を登りきった時、素晴らしい景観が見られる確率が高くなる。

私のひとり旅は、悲壮感のある旅ではない。孤独の寂しさもない。夢とロマン、
むしろ、心の躍動感。解き放たれた開放感があるから。
なぜ行くか、登るか、野暮な質問無し。結果のわかっていることをやるのは久楽流ではない。

余分な先入観や固定概念を排除した時に、思いもよらない、
スマイルオンミーの光景に出会える。運を信じたい。時には、神がかり的と思う。
多少の困難どころか、我を忘れるほどの緊張感や集中力なしに、その上の感動などない。

打ち寄せる波の音が心地よい。風を肌で感じる。少し風が強くなって来たようだ。
時間も相当経ったのではないだろうか。五感一杯に、この時を楽しんだ。
眼前の場面が、つぎつぎと変化する。何枚も撮らないのが久楽流。一期一会の瞬間のため。

やがて、波の大きさも打ち寄せる波の音も大きくなって来た。
ふと、足元が崩れるような気がした。その時、水しぶきが顔に。怒濤の波が次から次に。
これ以上は危険。直感と状況判断。夢想の時間は終わり。現実への対応。

脳裏に浮かんだのは「一発波」 海の波には、風、潮流、干満、
いくつもの原因から生まれたいろいろな波があるそうだ。個々に小さくなくても
偶然、波が重なり合うと、大きな波になり、一発波と呼ぶそうである。

平均2メートルの波が来ている時、統計では、100回に一回は、5m、半日に一度は、7m。
ここまで来ないと思っていたのに。突然、大波がきたと、磯釣りの人が言う。
自然の神秘と驚異、なかなか正確に把握できるものではない。どんな状況でも油断大敵。

今、ポルトガルの最先端にいる。詳細な波の情報などわかるはずがない。
その場を退散。そして、この作品が残った。
灯台と貝殻の断崖、対峙した光景が今も思い浮かぶ。良き思い出は心の財産。